

認知関連行動アセスメント

鶺鴒リハビリテーション病院

森田 秋子

akikomorita1@gmail.com

cba-ninchikanrenkoudou.com

認知関連行動アセスメント

(Cognitive-related Behavioral Assessment , CBA)

- 行動から高次脳機能障害を評価する
- 意識・感情・注意・記憶・判断・病識、の6領域を評価
- 各項目を
5点（正常）・4点（軽度）・3点（中等度）
2点（重度）・1点（最重度）
で評価
- 総合点：30点～6点

意識

覚醒

目がさめている、眠そうだったり、ぼーっとしていない

易疲労性

考えることに疲れることなくエネルギーを持続できる

日常生活に問題ない
程度に覚醒している

覚醒が不十分で
日常生活に影響する

・終始はっきりと
目が覚めている
・考える・話すこ
とに疲労を示さ
ず、エネルギーを
持続できる

5
良好

・時折ぼんやり
している
・新規な場面で
は反応低下を
示す

4
軽度

・終始表情はぼ
んやりしている
・考える・話すこ
とに疲れやすい

3
中等度

・日中時折傾
眠傾向をみとめ
る
・考える・話すこ
とにすぐに疲労
を示す

2
重度

・刺激がないと
常時傾眠傾向
である

1
最重度

感情

意欲・自発性

自分から行動したり話したりできる

感情表出

年齢相応の喜怒哀楽が保たれている

制御

年齢相応に感情をおさえることができる

← 明らかな違和感なし・少ない

→ 明らかな違和感あり

*もともとの性格を含めて評価する

生活場面で必要な、意欲や感情が保たれている

生活場面で必要な意欲や感情が損なわれている

・新しい活動にも意欲的である
・年齢相応の感情表出、感情制御が可能である

・慣れた活動は行うが新しい活動に意欲的でない
・固執・衝動・易怒・抑うつ・依存・退行傾向を軽度にとめる

日常的活動の実行に、指示や促しを要する
・固執・衝動・易怒・抑うつ・依存・退行などの傾向をよくみとめる

・日常的活動を自ら開始せず、促してもやらない
・固執・衝動・易怒・抑うつ・依存・退行などの症状を強く認める

・何事にも意欲・感情がない
・快不快程度の反応にとどまる

5
良好

4
軽度

3
中等度

2
重度

1
最重度

注意

選択・持続

対象に注意を向け持続することができる

分配・転換

注意を多方向に向け、同時に2つ以上の作業が行える

IADL

ADL

運転、料理、パソコン操作、入浴などの活動の様子から判断

用意された食事・整容、会話、運動障害が軽度の場合の歩行などの活動の様子から判断

細かい作業、複数の手順の活動が可能である

単純な作業、単一の活動しか行えない

・2つ以上の作業を同時に行うことができる
・作業中、他の刺激に反応し、適切にもとに戻ることができる

・2つの作業を同時に行くと若干成績低下がある
・過集中を認め、他の刺激に反応できないことがある

・1つの単純な作業を最後までやり終える
・干渉刺激が多くなるほど気が散る
・途中からエラーが増える

・干渉刺激があると必要な対象に注意を向けることができない
・1つの作業をすぐに中断してしまい持続できない

・必要な刺激に注意を向けることがほとんどできない

5
良好

4
軽度

3
中等度

2
重度

1
最重度

記憶

エピソード記憶

少し前、数日前のできごとをよく覚えている

展望記憶

予定や約束をよく覚えていて思い出すことができる

・生活に必要な記憶が保たれている

・生活に必要な記憶が保たれていない

・2～3日前の出来事想起が概ね正確である
・予定や約束事を忘れることは少なく、問題とならない

・当日中の出来事は正確に思い出せるが、それ以前の記憶は不正確である
・予定や約束事をたまに忘れてしまう

・当日中の出来事を一部思い出せるが、細部があいまいで間違っている
・予定や約束事を忘れることが多い

・当日中の出来事想起がほとんどできない
・予定や約束事を覚えておくことがまったくできない

・少し前の出来事を想起することができない
・作話や記憶の混同を顕著に認める

例) 朝来客があったことを覚えているが、誰だかが間違っている

例) 直前にご飯を食べたことは覚えているが、すぐ忘れてしまう

例) 直前にご飯を食べたことを覚えていない

5
良好

4
軽度

3
中等度

2
重度

1
最重度

判断

自制的判断

目先の利益に惑わされず長期的な状況を考慮して判断できる

「判断」を評価できる場面を作る、あるいはスケジュールや予定を利用する
例) 外泊の際、したいことは何か尋ねる
例) リハ担当者に伝えたい希望があるか尋ねる

・生活場面で適切な判断ができる

・生活場面で適切な判断ができない

・数年後の長期的な予測のために、必要な情報を考慮した判断、問題解決を行うことができる

・ある程度近い将来を見越した判断が可能だが、自分中心、あるいは他者依存傾向をみとめる

・しばしば場面依存的、近視眼的な問題解決をおこない、トラブルとなる
・わかっていることには自分なりの判断や主張がある

・しばしば即時の感情に依存した問題解決をおこなう
・生活上ごく部分的な判断のみ自力で行える

・しばしば物品依存的な問題解決をおこなう
・生活上適切な判断を行うことはできない

5
良好

4
軽度

3
中等度

2
重度

1
最重度

病識

障害理解	自分に生じた病気、障害、能力を理解し、できることできないことがわかっている
適応	自分の残存能力を理解し、環境に適応できる

「病識」の評価は、観察か会話で行う
観察の例) 自分の能力を考慮した行動をしているかどうか
会話の例) 「今お困りのことは何ですか」「～は一人でできそうですか」
などへの返答から、自分の能力をどう感じているのかを探る

・病気・障害をよく理解し、環境に適応して生活できる

・病気・障害を理解できず、環境に適応できない

・自己の病気、障害、能力をよく認識している
・残存能力を有効に活用し、環境の変化に自ら工夫して適応できる

・自己の病気、障害、能力を概ね理解し、深刻性の認識がある
・残存能力活用が十分でない

・自己の病気、障害、能力の認識は大まかであり、深刻性に乏しい
・よく整えられた環境にしか適応できない

・自己の病気、障害をごく大まかにしか認識できない
・よく整えられた環境下にあっても周囲の援助を必要とする

・自己の病気、障害、能力を、全く認識していない
・よく整えられた環境でも、全面的援助が必要である

5
良好

4
軽度

3
中等度

2
重度

1
最重度

全般的認知能力とCBA

	特徴	ADL等	目標と対応上の注意	得点の目安
良好	<p>病前とほぼ同様に、記憶や状況理解が保たれ、通常生活に必要な行動が可能である</p> <p>正確で複雑な手順を必要とする動作が可能で、職業や屋外行動も検討できる</p> <p>場面ごとに適切な判断ができ、他者との正常な関りができる</p>	<p>屋外自立</p> <p>復職可能</p> <p>高度な趣味</p>	<p>復職・屋外活動・趣味などを拡大していく</p> <p>本人のニーズに沿う</p>	28点以上
軽度	<p>記憶や状況理解は概ね良好で、自力でできることが多いが、細かい記憶、込み入った動作では不十分な点がある</p> <p>環境が整った場所では自立できるが、難易度の高い場所や場面では、他者の援助を借りることがある</p> <p>他者との関りは概ね可能だが、どのような時にも万全ではない</p>	<p>屋内自立</p> <p>簡単な趣味</p>	<p>生活の安定・拡大</p> <p>自立度の向上</p> <p>自分らしい生活の実現</p>	22～27点
中等度	<p>記憶や状況理解は大まかにわかるが、不正確であいまいなため、発言は不確実である</p> <p>自己の状態に対し深刻さが不足しており、危険認識が不十分なため、事故につながりやすい</p> <p>ADLではできることもあるが、確認不十分で動作が雑なため、見守りがはずせない</p>	<p>屋内見守り</p> <p>誘導、声掛けが必要</p>	<p>危険のない生活</p> <p>できることを自分で行う</p> <p>家族の理解向上</p>	16～21点
重度	<p>簡単な会話は可能だが、記憶や状況理解が不良なため、つじつまが合わない。</p> <p>判断力が低下し、ADLには重度介助を要すが、協力動作が出現する場合もある</p> <p>限定的な意思、感情、判断を表出する</p>	<p>重度介助</p> <p>食事・部分的なコミュニケーション</p>	<p>食事の充実</p> <p>家族誘導でのコミュニケーション拡大</p> <p>快適な生活リズム</p>	10～15点
最重度	<p>ほぼ、常時閉眼している</p> <p>働きかけに対し、反応がみられない</p> <p>顔をしかめるなどの変化がみられることがある</p> <p>すべての行動に全介助を要す</p>	<p>全介助</p> <p>飲み込めは可能な事例あり</p>	<p>環境調整</p> <p>状態の維持</p> <p>終末期の準備</p> <p>家族支援</p>	6～9点

CBAを用いるメリット

高次脳機能障害をわかりやすくとらえる

- 自分たちにわかりやすいことばを使う
- 異なる職種であっても、理解を共有できる
- どのくらいしっかりしているのか、を探る
経験が必要
難しい顔をしているからしっかりしている、というわけ
ではない
- 観察力を磨いていく

経験者の直感・実感を数値化する

- 「この人は、意外にしっかりしている」「しっかりしているようで、実はあいまい」など、経験者が日々感じていることを、数値化する
- 評価することで、高次脳機能障害への理解を深める
- 高次脳機能障害の専門家でなくても、評価できる点がメリット

重症度を明確化する

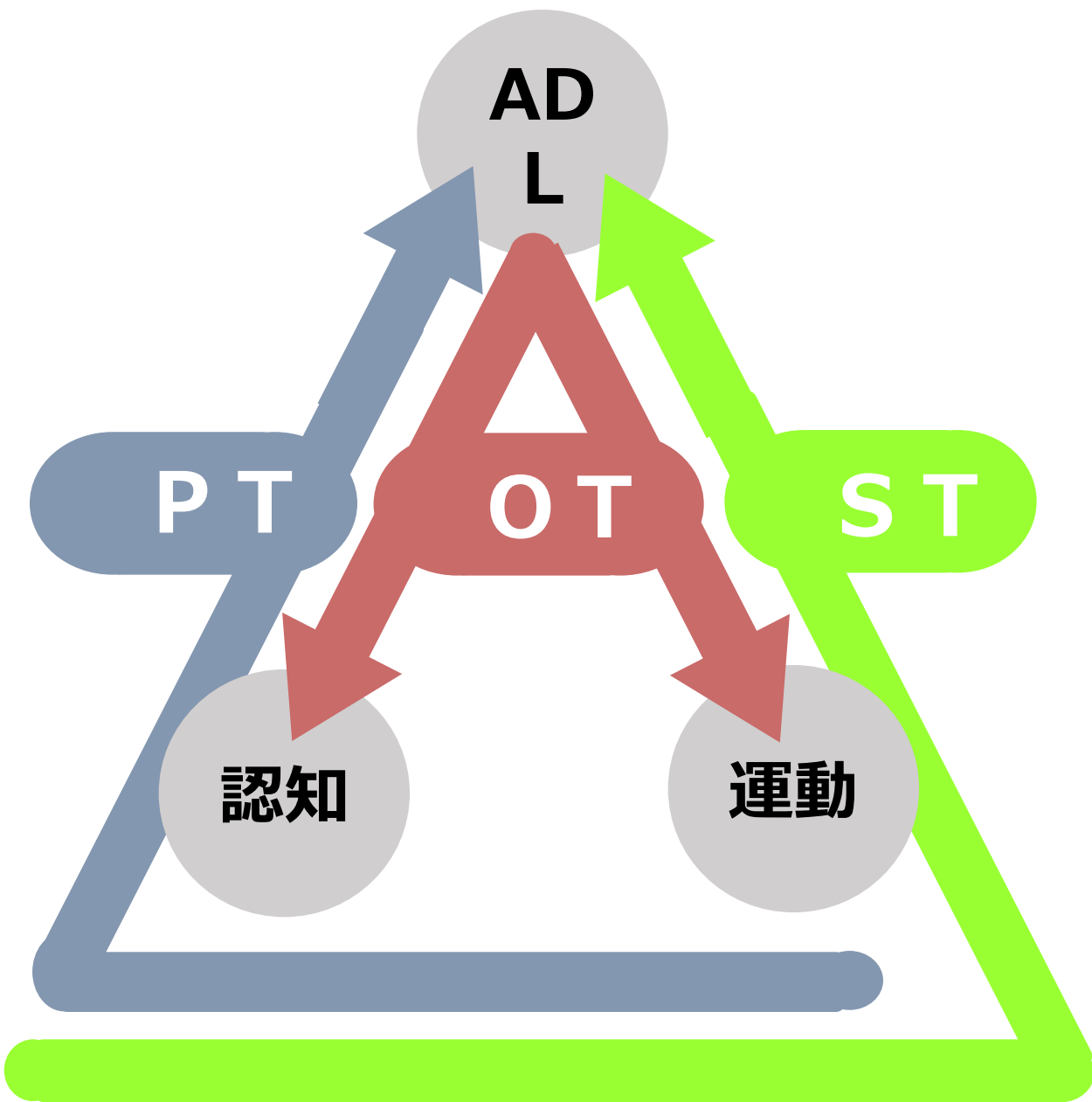
- 良好、軽度、中等度、重度、最重度、を判断する視点を身に着ける
- はじめは厳密でなくていい。徐々にわかってくる
- 各重症度の特徴を覚える
- ADLとの関りが強いことを理解する

チームで使用する

- 複数のスタッフで評価し、話し合うことで精度があがる
- 各項目1点、合計点3点は誤差の範囲
- 見ている場面が違うと、点数は異なることがある
- 話し合っつけてつくと、合意できる
- 1点1点を厳密につけることより、大まかな全体像をとらえることが重要

データ収集し、知見を得る

- 失語、失行、失認等の障害の有無によらず、認知機能と活動との関係を、データから探ることができる
- ADLと認知機能
- 歩行と認知機能
- 口腔内衛生と認知機能
- 排泄自立と認知機能
- 転倒と認知機能
- 1人暮らしと認知機能



PTは運動のプロ

高次脳機能を理解し
歩行やADLに
アプローチできる

STは認知のプロ

運動・ADLを理解し
認知の行動への
影響を語れる

OTは活動のプロ

活動の中から
運動と認知を
みることができる